



白幽子款印「慈」

白幽子探究といふが如きは私にとつては固より餘業であり、又たとひ白幽子の史實が今日明かにされたところで篋底深く塵に任すべきが白幽子その人の素志に契ふやうにも思はれるが、それにも拘らず茲に敢て秃筆を呵きんとする所以のものは、もし當來に於て白幽子の史實が明かとなつて、その思想を傳ふる如き新資料がなほ多く發見せられるとするならば必ずやそれらには吾吾後昆を教誡するに足るものがあり得るであらうと考へ、弘く博雅の提撕を仰がんが爲に外ならぬ。

(一) 藤井象水撰「白幽子傳」

(二) 宜遊草

(三) 落栗物語

(四) 譚海

(五) 本朝神仙記傳

伊藤和男

丙 西 遊 記

丁 梧 窓 漫 筆

戊 良 寛 と 白 幽 子 傳

己 其 他 の 資 料 二 三

畸人傳所載の眞蹟に就いて

白幽子が架空的人物でなくして歴史的に實在の人物であることは今日もはや疑ひえざる事實となつた。そして私は白幽子の歴史性を論證するに當つて、その靈名記（過去帳）並に眞蹟にもとづいてこれを爲し、また前説（『禪學研究』第三十五號「白幽子史實の新探究」）に於て、靈名記で不審の箇所を修補せんが爲めに資料を博搜すると同時に従前の先入主を悉く拂拭し去つた上で、これらを一一檢討批判して採擇すべきは採擇し、割愛すべきは割愛して以て白幽子史實の眞相を明らかにした。ところで今更に二三の資料を涉獵するを得、嚮に言及し足りなかつた點や前説を愈々確證せしむるに足る事實をも見出すことができたから、前説の補遺の意味で茲にそれらの顛末を敘べようと思ふのである。

白幽子の史實としては多く隨筆の形で口碑傳説として巷間に流布したものが殆んどその大半を占

め、禪門内で行はれたものは白隱撰『夜船閑話』（『寒山詩闡提記聞』・『遠羅天釜』・『壁生草』にも述べられてはゐるが、これらは『夜船閑話』と同工異曲のものか、それから援引したものである）、東嶺撰『白隱禪師年譜因行格』並にその註疏（大觀撰）位のもので、それ以外には杳としてその消息を知らない。この點から考へると、巷間にあつては白幽子のいはば神僊めいた行狀が噂に噂を呼んで如何にもまことしやかに誇張喧傳せられ、京雀の語り草として興味を惹きさうな好話柄を提供したに反して、禪家にあつては流石にかかる巷説に煩されなかつたものと思はれる。といふのは、『夜船閑話』の筆致が神僊的粉飾の極めて濃やかなところから禪家をして白幽子に關心を惹かしめるどころか却つて敬遠せしむる結果にたち至つたことと、一體白幽子が白隱に傳授したといふ輕酥の法なるものは、たとひそれがいはゆる禪病治癒の單なる便法に過ぎぬにしても禪の思想とは餘程違つたもので、むしろ異解とさへ看らるべき性質のものであつた上に、白幽子の行實の討査といふが如きことは禪そのものからいへば大海の一波瀾にも値しない些事であり、禪家にとつては必ずや果さるべきより本質的な課題が他に残されてゐる筈であるといふ斯様な種々の理由にもとづくのではなからうかと考へられる。それ故禪家がかかる餘業に携はらなかつたことは結果としてはむしろ欣ぶべきことであつたかも知れない。兎も角これらの理由によつて古來白幽子の史實は禪家の餘り顧るところとならなかつた。しかし乍ら白幽子の史實にして禪門内で行はれるものが如何に寥々た

るものであらうとも、『夜船閑話』に於て、正受老人とは異つた意味で白幽子が五百年間出の大禪匠白隱のいはば師として登場したことは、白隱以外に訪幽者を三者（若霖・象水・久敬）までも數へうるにも拘らず、何としても白幽子に千鈞の重みを與へるもので、世人をして彼を再認識せしむるに充分であり、巷間所傳の史實の如何に拘らずそれらは擧げて白隱訪幽の事實に一籌を輸すべきであらう。宜なる哉、巷間所傳の白眉『崎人傳』にしてもが白隱訪幽の事實を骨子として成れるものであり、餘の多くがこの事實に専ら關心を置いてゐることはかかる消息を首肯せしむるに足るものである。斯くて固より白幽子の史實は文獻の上では『夜船閑話』以前に溯りうるが、問題は白隱訪幽の事實を契機としてそこに展開さるべきではなからうかと私は考へる。

次に嚮の探究に於ていひ足りなかつた點や新しい諸文獻を擧げ、これらに一一論評を加へることとする。

〔一〕 藤井家水撰「白幽子傳」 これに就いては既に論評したところであり、内容としては左程みるべきものではないが、ともかく白幽子傳としては最古のものと考えられるから、いま便宜上その全文を擧げておかう。^{*}

道人は何許人なるを知らず、亦其名字姓名を詳かにせず白幽子は乃ち其別號なり。生來甫めて十餘歳脱然出塵の想あり、仍て其親しくする所を謝し、洛北某山に入りて修煉す。竹楹茅舎を爲

謹志箴 白幽子
夫長於靈壑青松下
無有游觀廣覽之知
顧有至愚孤陋之累
晏然哀吾生之須臾
平日好讀書不求甚
解窺聖賢之道不慕
榮利安貧不蔽風日
一褐一瓢屢空不憂
今日而俟天命而已

白幽子真蹟寫 (續近世畸人傳所載)

り僅に膝を容るゝに足る。猿鹿と群を同くし薇蕨を食に充つ。三年の後居を勝軍の山に徙す。山は白川の北に在り。其翠微に一巨石あり、高さ六七尺中間に一小洞あり、方五尺許り葦を編みて簾と爲し以て洞口を塞ぐ是れ道人の住する所なり。白雲上を覆ひ碧蘚下を埋む、壁立路絶え登る者皆垂蘿に攀ちて初めて達す。道人容貌魁岸、頭髮垂れて背を掩ふ。眼に赤光あり、風彩常に非らず。風雪の惡、炎蒸の酷、端坐巖然として恰も泥塑の人の如し、烏其懷に入り、神色自然たり。蜂房其袖を結び兀として動かす。豺狼も之を犯す能はず魑魅も之を惑はず能はず。此の如くして山に住すること幾んど三十年、蓋し是れ機を忘るゝ者に非ずして何ぞや。道人頗る細伎に通じ尤も草書を好くす。筆を下せば乃ち雲龍の勢を成す。其用ゆる所の毛錐皆自ら之を製す。亦人間の巧能の及ぶ所に非ざるなり。且女工を知り、裁縫洗濯自ら之を爲す。其服乃ち單合にして裏なし、寒暑皆之を用ゆ。又能く健歩山坂崎嶇の間を行くと雖毎に木屐を著し、其走ること風の如し。自ら謂ふ、一日行くこと二三十里亦異ならずや。余道人と交りを結ぶこと年有り、時に或は之を訪ひ、其志を問へば則云々、其道を問へば云々、皆洒然として人間の語に類せず。其幾んど儒者の言に反するあり、今具さに其言を述べざるは則ち敢て之を祕するに非ず、余亦其旨を得ざるなり。其飲食を問へば則曰く、飲は之を谷に取り、食は之を山に取る。又曰く、酒肉を食せずと。余曰く胡爲ぞ食せざるや。道人曰く敢て食せざるに非ず、山中求む可らざるなり、達者の見と謂

つべし。顧ふに夫れ我が東方地靈の人傑、是以て古來異器に乏しからず、余嘗て異を以て之を尙ぶ者僅に五人あり。所謂役小角也、越泰澄也、三井教侍也、清水行叡也、松島見佛也、然り五子は姑く身を釋門に托すと雖而も其仙風道骨誠に卓異識にして純粹なる者也。又嘗て久米阿曇、大伴等仙及汝淨貴所ありと雖も其言或は妄誕に近く、其事間ま妖怪に流る。故に吾敢て取らず。嗚呼夫れ五子は世を去る已に遼遠なり、而も其風尤復觀るべし。今我の目撃する所のものに於ては則ち白幽子其庶幾乎。白幽子傳成る、或人余に謂つて曰く、子亦異を好むある乎。余之に答へて曰く、敢て異を好むにあらず、凡を疾む也。

元祿六癸酉年四月

〔二〕 宜遊草 『畸人傳』はその正編に於て白幽子の實在性に就いて疑義を残してゐるが、續編では武州金澤の僧若霖(桃溪)の著『宜遊草』なる詩集に、訪白幽子詩二首が載せられてをり、白幽子の眞蹟や墓碑が現存するとの諸理由から「其の人の實有は論なし」といひ、ただ白隱訪幽の年紀に關しては依然として疑問を懷きながらも兎も角白幽子の歴史的實在性を承認しようとしてゐる。茲にいふ所の『宜遊草』なる詩集は書肆竹笥樓(京都寺町に現存す)が自分に示したものだといふ閑田子はいつてゐるが、『桃溪遺稿』の序に於て宗朗も「遺稿散失。得者甚尠。云々。」と述べてゐるやうに今日散逸して傳つてゐない。眞宗全書にも詩稿として『桃溪遺稿』・『桃溪遺文』は擧げられてゐる。

るが、『宜遊草』は編入されてゐない。なほ白石の『停雲集』にも白石と操觚の友であつた關係から桃溪の詩賦が登載されてゐるやうであるが、まだ披見の機を得ない。

若霖は滋賀縣蒲生郡日野町なる本願寺派正崇寺に住し、本派第四代の能化であつた。若くして知空に見出され、寵用せられたが、一時異解の廉で叢林から破門せられてからは諸處を歴遊して紀行の感興を詩に賦し、畿内を遊方、放浪自適したといはれるから白幽子を白川に訪ねたのも恐らく事實であらう。詩稿中にも「遊東福寺」・「孟冬山科晚行」・「登伊吹山」・「八瀨晚歸」など存し、洛外に周ねく杖を曳いたことが知られる。また白隱訪幽の年紀寶永七年には若霖は三十七歳を算へたから若霖訪幽の事實は年紀の上からいつても恐らくありうべきことと考へられる。わけでも白幽子と若霖とがいづれも武州の産で、故山を同じうすることは奇しき縁であらう。

次に前説で挙げえなかつた二つの資料について述べねばならない。一は藤原家孝著『落粟物語』二卷(大正六年・國書刊行會)いま一つは津村正恭(淙庵)著『譚海』十五卷(大正六年・國書刊行會)である。これらは内容的にも左程みるべきものではなく、必ずしも斬新な資料を傳へるものではないが、一應は通覽さるべきであらう。

【三】落粟物語 本書は寛永三年(二二八六)將軍家光父子の上洛のことより安永八年(二四三九)後桃園帝登遐の御事まで凡そ百五十年間の見聞録であるが、その前篇に、

「山城國白河村の上なる山に、往來の道より八九町餘り隔て、一ツの岩屋あり、其内はわづかに三四人入るばかりの廣さにて、下は平にして上は中高く、めぐりに苔むし、岩屋の口に蔦かづら生かゝり、上には松一本有てかさをさしかけたるに似たり、永祿のころ、其岩屋に一人の異しき者草を敷て筵として住り、いづこの者とも知らず、年のほど六十餘と見ゆるが、身すぐやかにして、道をゆく事よの常の人に越たり、里の年老たる者ども行て物語りするに、それが親祖父の年若き時の事を眼の前に見しやうに委く物がたりけり、食を與ふれば魚類の類はくはず、酒をすゝむればのみて歌なんどうたふ、少しのみし時も心よく酔たるさま見ゆ、ひたすらしひて多く飲せぬれども、只いつまでも同じさまなり、其名を問へば泊遊と答ふ、書籍を論ずる者あればしらすとのみいふ、三年ばかり有ていづちへ行けん見えず」

本文によつて明かなる如く白幽子は永祿(二二一八—二九)以前の出世であり、而も假りに正統の寶永六年(二三六九)遷化説を採るとすれば尠くとも享壽百數十歳を下らないこととなり、文字通り神僊的性格を賦與したものと看なければならぬから、この叙述は單なる口碑傳説の類ひであつて白幽子の實傳を傳へたものとは受取り難い。またその名泊遊とあるは巷間の風聞を傳へ聞いてそれを充てて字で音寫したに過ぎぬもので、忠實な討査の結果でなく誤傳なることいふまでもない。

〔四〕 譚海 本書は安永四、五年(二四三五、三六)(淙庵四十餘歳)の交より筆を起し、寛政

七年（二四五五）まで凡そ二十年の歳月を閲して就れるもので、涪庵は文化三年（二四六六）夏に歿した由であるから享壽ほぼ七十餘歳、白幽子歿後二十數年後の出世、白隱と同時代以後の人と推定される。本書所收の白幽子の史實は卷十一に白隱和尚の逸話二三を擧げて後に左の如く録されてゐる。

「同じ和尚在京の時、白川の奥へ行けるに、岩窟にすむ人あり、入口にはよし簀一枚を寄かけ有、入て見れば五十歳計成男、白髪はおどろの如く亂れ、淺黄單物一つ著て有、机一脚有て其上に金剛經一卷のせて有、此外に隨身の器物一つも見えず、和尚暫物語せしに、此人年來食する事なく、渴すれば溪水を飲て暮すといへり、冬月單物一つにて寒くはおはさずやといはれければ、此人すねをかきあげて見せしに、汗うるほひ肌暖にして、酷暑に坐する人の如し、丹田をねりて如し此成由、養生の術を語りぬるを、和尚書記して野仙閑語と題號せし書あり、此人白幽先生と號するよし、三百八十歳に至るといへり、和尚別を告て辭する時、此人十町餘りも送りてわかれ去れり、後かげを見送りたるに、冰雪の山路を分て行事、鳥の飛如く速に見えたり、其後又和尚尋行たるに其所に非らず、行方を知らずと云ふ」

文中、野仙閑語とあるは『夜船閑話』の間違ひなることいふまでもない。『夜船閑話』の制作は實曆七年（二四一七）であるから涪庵がこれを知りえたことは想像するに難くないが、涪庵は實際

に本書を見たのでなく風聞を聞き間違へて録したものであらう。しかし茲に白隱訪幽の事件を拉し來つたことは彼が白隱と同時代の人なることを偲ばしむるものがある。兎も角本書も神儼的筆致の極めて濃いものであるから實在の人物としての白幽子を描出したものと看することは困難である。ただ再度の白隱訪幽の事實は餘の文獻には全く見られない斬新なものであることに留意すれば足りるであらう。

〔五〕 本朝神仙記傳 いま一つ擧げらるべきは宮地嚴夫の『本朝神仙記傳』上下二卷であつて、これに就いては嚮の研究に於ても關説したが、頃日本書を披見するの機會を得たから茲に内容を紹介しつつ仔細に検討しようと思ふ。

本書下卷劈頭に「白幽子」の項があり、これは著者の註記にもある如く、前記二本並に『夜船閑話』・『崎人傳』・『遠羅天釜』にもとづいて纂輯したもので、史實としてはみるべき程のものではないが、著者が最近の人（弘化四年九月三日生——大正七年六月十五日歿）であるだけに涉獵の廣汎は餘の類書にその匹儔をみない。冒頭に「白幽子は、姓は源、氏は石川」とあるが、これは靈名記所載の如く白幽子が石川氏の出なること、明白に符合することが知られる。著者はこの消息を白幽子の眞蹟の摸寫なるものを見て茲に採録したらしく、その顛末を誌して、「其は白川村に住する某の所有にして即ち世に三社の託宣と稱するものを書き、其裏面に、正しく同筆の張紙ありて、其張

紙は、三行に書きたるものなり。先初行には少しあげて、元祿乙亥九月九日と書き、二行には、父姓石川源氏、三行にはまた少しさげて、白幽子拜書と書きたるが、表には印もありて、其紙質、墨色、印色等總て一致して元祿時代のものに相違なく、字體は石川丈山の筆意に似て、極めて品格備はりたるを以て、一見真正のものたるを信ぜしめられたりと云ふ」と語り、更にこの眞蹟の摸寫はもと著者の友、當時東京在住の俳人徳弘太無なる者の所寫に係るといつてゐる。ところで嚮の研究に於て推定せられたやうに私が實地討査した白川在某家所藏の三社託宣の眞蹟なるものと右の眞蹟とが全く同一物に相違ないことを私はいま明白に確證することができたわけである。わけでも書體が丈山の筆意に似て隸書にまがふものなること、森氏所藏本や『畸人傳』所載の眞蹟とも符合し、張紙記載の年紀、姓氏ともに靈名記記載の享壽、姓氏とも矛盾しないから、白幽子の眞蹟なることには疑を挿む餘地は毫も存しないといはねばならぬ。

また古來眞如堂の北、芝の墓に墓碑の存したことは既に『畸人傳』にもこれを挙げ、『續平安名家墓所一覽』にも收載されてゐるから間違ひなき事實であり、明治三十四年に竊去せられたことも現存の墓碑の撰文によつて明かである。然るに、この墓碑の所在に就いてはその消息杳として今日まで明確に知られなかつたが、『神仙記傳』の著者の記述によつて甫めて明瞭となつた。即ち、「然るに此の碑石は、不思議にも余が友人にて、現今東京に在住する俳句の宗匠、月の本の主人、徳弘

太無氏の手に歸して現存せり。碑面碑陰及碑の左側等の文字は、前に記せると全く異なることなし。碑石は白川山石にて、高一尺四寸、幅八寸五分、厚八寸、頂尖五分、臺石も同石質にて、横一尺五寸五分、幅一尺二寸五分、厚七寸ありと云、而して此碑石の太無氏の手に歸したるは、明治二十三年頃より、同氏道學の研究に志し、就中白幽子の跡を慕ひて右墓地に接近せる東北院に住し、白川山なる白幽子巖居の跡を確定し、遂に其所在の山林を購入して、自己鍊丹の地と爲したる時右碑石は無縁の廢石となりてありしを、所在の墓地監理人某氏の許諾を得て、引取りたるが縁と成て今日に至りたるものなりとぞ」といつてゐるが、この墓碑は最近東京は青山墓地で發見せられたことを確聞したが如何がなものであらうか。

〔六〕西遊記 本書は橘南谿（橘春暉）の撰で、その卷四に「仙人」の項があり、それに從へば、「おほよその人皆才徳の事に限らず、もし長生を得んと欲せば、深山に入り、飲食を斷ち、思慮をやめ云々」から始まつて、雲居官藏、吉村專兵衛二仙人のことを敘したる後に、「九州に此二仙人有り。中國邊にてはたえて無き事也。京都白川の山中には白幽先生ありしが、今は若州の山中に移れりといふ。仙術の事もろこしのみに限らず、廣き天下には種々の異人も多かりき」とあるを『神仙記傳』は引用し、これを論評して、今は若州の山中に移れりといふとあるは、寶永七年（白隱訪幽の年紀）以後、天明の頃までを含めていつたものに相違ないと斷じ、「此等に因ても白幽子の

死したりと云ふ傳への無きを知るに足るべし」と仙人長生の事實を論證せんとしてゐる。

〔七〕 梧窓漫筆 本書は太田錦城（文政八年歿・享壽六十一歳）の撰で、そのうちに小瀬復菴順元の事を記せる條下に神僊實在の證として嚮の『西遊記』の文をそのまま援引してゐることも一顧に値するであらう。

ところで橋南谿は文化二年（二四六五）京都伏見に享壽五十三歳で歿し、黒谷山に葬られたのであるから寶曆三年（二四一三）に出世したこととなる。『神仙記傳』の著者は『西遊記』が寶永七年から凡そ七十年を経た天明年間（二四四一—二四四八）に著されたといふ理由から、嚮にもいつたやうに、「今は若州の山中に移れりといふ」とあるは、これ明かに白幽子がその頃まで存命してゐた證左であるとなしてゐる。しかし、斯くいふ爲には餘程嚴密な考證を俟つべきであつて、一體『西遊記』そのものの敘述にしてもが數十年前の風評を現前の事實の如くに傳へてゐるやも計り難いのであるから、一一事に當つて仔細に究めざる風聞の蒐録にも等しい本書を盾にとつて論斷せんとするが如き著者の態度には私は慊焉たるものがある。惟ふに宮地嚴夫なる人には別に『自修鎮魂法秘訣入門』の著があり、神僊の實存を信じて疑はざるのみか峻嚴な養神の法を自から工夫實修してゐたやうである。従つて『畸人傳』や『玄同放言』など自餘の諸説を悉く排撃して、「故に余は白隱禪師の白幽子に關せる記事を疑ふ説は一切之れを採らざるなり」とさへ極言してゐるが、これ

白隱禪師を仰信するの餘、斯くなしたことを固よりいふまでもない。しかし今の場合史實の探究は飽くまで嚴密な探究として別に尊重さるべきであると私は考へる。やはり私としては靈名記記載の史實に準據しつつその中で不審の箇所を餘の資料を俟つて修補して以て史實の真相を查證すべきが最も妥當な方法ではなからうかと思ふ。もし宮地嚴夫その人を今日再生せしめ、白幽子の靈名記現存の事實を看せしめたとしたら如何がであらうか。

〔八〕良寛と白幽子傳^{***} 『良寛全集』(大島花東編) 三五六一七頁に、

歲寒之時節御清和に御凌被遊候や。白幽子傳彌御つとめ被遊候哉。野柄は彼の法を修し候故か、當冬は寒氣も凌ぎやすく覺候。

有詩云。

紛々莫逐物 黙々宜守口 飯喫腸飢始 齒叩夢覺後 令氣常盈内 外邪何漫受 我讀白幽傳 聊得養生趣

良 寛

七 彦 老

とあり、この文中の偈頌は『良寛和尚尺牘』(相馬御風編)所收のものと二三相違する箇所がある。即ち相馬本では黙々が點々、飯が飲、漫が慢になつてゐるが、これは誤植ではなく恐らく誤讀であ

つて、大島本の方が意通するやうであるから大島本が正しい讀方であらう。(なほ大島・原田譯註『良寛詩集』一四五頁參照。) 惟ふに良寛の書は古來難讀の定評ある書で、その道の專攻者をすら、「始めは其讀下し難いに艱み、寒山詩より出た詩偈の如きを悟り書は懷素から出てゐるのを知つて、始めて遅い足どりながら判讀したのであつた。今其當時の誤讀を想起しては背中に汗をかく」(アトリエ社版『良寛遺墨』中「良寛の書」・高野辰之) とまで歎かしたほどであるから、多少の誤讀は誰しも免れ難いであらう。また宛名に七彦老とあるは山田權右衛門のこと、彼は良寛の甥山本泰樹の妻の實家であつて『良寛和尚尺牘』、他に同人宛ての書簡が二通存するが、それに據ると良寛に非常に懇篤な人であつたやうである。その二通の書簡とは『良寛全集』同所、

過し頃は菓子しろ恭受納仕候。この頃は百合根を。

新玉の年はふれどもさす竹の君が心はわすられなくに

良 寛

七日市 御老人

○ 年内はゆりつと^{*}うやくしく納めまいらせ候

よの中はかはり行けどもさす竹の君が心はかはらざりけり

五月十一日

良 寛

*筆者註「ゆりつと」とは「百合菖菖」ではなからうか。
である。

ともあれ右の良寛の尺牘によつて見られる如く良寛その人が白幽子傳を讀み、剩へ輕酥の法を自から實修し、人にまでもこれを薦奨した事實は何としても特筆大書さるべき事柄であり、白幽子の懿徳が不世出の逸僧良寛にまで波及せるを知るに至つては且つは驚き且つは感歎これを久しうせざるをえない。そして良寛が讀んだ白幽子傳なるものが果して如何なるものであつたかは固より明確には知る由もないが、もし現存の資料中にこれを索めるとするならば、『夜船閑話』ではなく、『畸人傳』ではなからうか。といふのは良寛は寶曆八年(二四一八)の出世、天保二年(二四九一)、七十四歳で示寂し、『夜船閑話』は寶曆七年(二四一七)の制作にかかり、『畸人傳』は寛政二年(二四五〇)に京都で刊行せられ、更に續編が同十年に上梓され、而も良寛は同七年既に上落してゐるから良寛が兩書を知りえたであらうことは年紀の上からいつてむろん確かであるが、『畸人傳』は當時巷間に遍く流布し、餘りの好評に續編さへ上梓するに至つたほどの素晴らしい流行をみたやうであるから良寛が手にした白幽子傳なるものも恐らく同書と考へられるからである。もし『夜船閑話』ならばその名を擧げたであらう。さあれ『畸人傳』にしても蒿蹊自から明言せる如く、『夜船

閑話」や「闡提記聞」の換骨奪胎に外ならぬのであるから修身内觀の法だけに就いていへば、實質上は「夜船閑話」と何ら異らないものではある。

斯様に良寛その人が白幽子に私淑した所以は、良寛が「世の中にまじらぬとにはあらねども、ひとりあそびぞわれはまされる」と詠じ、また「少小擲筆硯 竊慕出世人 一瓶與一鉢 游方知幾春 歸來絶巖下 靜卜草堂貧 聽鳥充絃歌 瞻雲爲四隣 巖下有清泉 可以濯衣巾 嶺上有松柏 可以給柴薪 優游復優游」と頌出せる遁世脱俗の爲人が、「謹志箴」に於て見られる如き白幽子の恬淡隱逸の風趣と感應道交した爲であつて、蓋し偶然ではないであらう。

〔九〕 其他の資料二三 『略傳十三朝紀聞』寶永六年八月の條下に白幽子のことを記し、『益軒叢書』第一冊「舊識」のうちにもその名を擧げ、また淺加久敬は『都の手ぶり』に、「白川白幽子に逢たりしことはいまた清書いたさす云々」と録し、それは元祿十五年のことのよしであるが（以上、森 銑三校註『近世畸人傳』「後註」に據る）、益軒は正徳四年（二三七四）八十五歳で歿したのであるから（白幽子の歿後五年）、白幽子と同時代であつたことは明白である。また『都の手ぶり』は京洛四方の見聞を蒐録したもので、右の如く久敬訪幽の年紀を元祿十五年（二三六二）とすれば、これまた「靈名記」と全く一致し、白幽子の生前なること毫も疑を容れないから信憑するに足る記録であらう。しかし遺憾ながら今はこれら諸文獻を詳しく參照しうる事情に置かれてゐない。

ともあれ今日吾吾に知られてゐるだけのこれらの諸文獻によつてさへ白幽子が如何に世の耳目を蒐めてゐたかは想像するに餘あるものがあり、その感化果して那邊にまで及ぶか全く逆睹し難きものがある。なほ當來に於ける新資料の發見とその成果とに更に新たな關心が懸けらるべきである。

畸人傳所載の眞蹟に就いて

嚮に掲出したこの白幽子眞蹟は、『畸人傳』續編に登載されてゐるもので、「又白幽子自筆の作文を、或人の藏せるを借り出でて見せられしかば、其のまゝに寫して左に掲ぐ」と著者蒿蹊自から斷つてゐるやうに、蒿蹊自身の摸寫にかかるもの如く、原本の所在に就いては今日まで寡聞全くこれを知らなかつたが、頃日確かな手がかりを得たので、所藏者に再三その調査方を懇請したにも拘らず、原入手者が既に故人であるために討査に周到を缺いた故か、但しは既に餘人の手に轉じた故か、左程明確な結果が得られなかつたのには、あたり家珍を蠹魚の蠶食に委ねる心地せられ、遺憾といふもおろか寔に焦心の念抑へ難きものあるを覺えしめられるのである。(昭一七・六・一四)

〔註〕

* 京都北白川禪法寺上梓『北白川名勝古蹟之一』に據る。この原漢文は『近世畸人傳』(森 銑三校註)の「後註」に従へば、「以文會筆記」(文理科大學圖書館藏)第十九冊に收載されてゐる由であるが、今は原文を参照し得なかつた。

** 阜月九日、土曜日の午さがり同好の學生諸君を東道して、北白川に白幽子の遺蹟を訪はんとする途次、横井聖山君は、良寛が白幽子傳を讀んだといふ記事ある旨告げられたので、日ならずして直接、文獻に當つて討査したところ方しくその尺牘中に、左様な消息を見出すことができた。茲に同君に對して衷心より謝意を表したいと思ふ。